をなした啓蒙思想家だというイメ

新期日本の欧化政策に大きな寄与

ージが強かろう。

体と同じくその根本においては私

福澤によれば、人間は他の生命

らんとしている。 いかにも遅い判 鮮の核もついに実戦化の段階に入

を強く訴えたのである。 しそが「立国の公道」であること

であり、個の私情こそが至上の価

値をもつ。同様に外国に対する場

すなわちナショナリズムという が湧き出で、国民としての私情 台には、必ずや同胞としての私

偏頗心」が優位を占めなければ

るようになった。

いう姿勢を、日本もようやくみせ を嫌悪し、外交に過剰な期待を寄

原則には「平和国家として、専守 戦略を実現するのに必要な基本的

防衛に徹し、他国に脅威を与える

これで強大化をつづける中国の軍

らず。今の日本国人を文明に進る

せるパシフィズムから脱しようと

閣議決定の運びとなった。軍事力 全保障戦略に関する安保3文書が 断ではあったが、昨年末、国家安

めるものとなる」と訴えた。

大いに評価したいのだが、

自分で守り抜ける防衛力を持つこ ならないが、同時に「自分の国は ゆえ力強い外交を展開しなければ 中にあるという認識に立つ。それ

述べるのは自己矛盾ではないか

方、他方では専守防衛と非核

他国に脅威を与えるような軍事

目的を定めて文明に進むの

しは、そのような外交の地歩を固

において文明開化なる用語を編み

『文明論之概略』により維

福澤諭吉といえば『西洋事情 福澤諭吉の思想的立脚点

としての文明からは隔たるもので ならない。私情や偏頗心は、普遍 あらわにしている以上、みずから はあれ、各国民が私情と偏頗心を

もたない。そういう主張が福澤 もこの徳目を重んじなければ国は 遠い過去に採用された理想主義

国主義列強がアジアを蚕食する

たことには留意が必要である。帝

(『瘠我慢之説』)であっ

点が「立国は私なり、

が「立国は私なり、公に非ざるしかし、その福澤の思想的立脚

方、中国、朝鮮がこの「西力東

している現状を眺め、福澤は公

に旧套の中に閉じ込められて逼

の力学をまるで理解できずり

法と憲法解釈に身を委ね、自国の 的な、というより空想主義的な

防衛に己の身を削ることの少なか

たのがわが日本である。

く、私(ナショナリズム)の強化

がなおつづく。中国では台湾併合

も厳しく複雑な安全保障環境の只

新戦略は、現在の日本が戦後最 しれで中国に対抗できるか

が踏襲されているではないか。

一原則を堅持する」と旧来のもの

ロシアの残忍なウクライナ侵攻

への野望がにわかに強まり、北朝

(コスモポリタニズム) ではな



拓殖大学顧問

ような軍事大国とはならず、非核 反撃能力が担保できるか 則、必要最小限度によって確かな

この難局にあっては、福澤のい 大樹の陰に隠れていいか

原則を堅持すると同一文書の中で 衛力を持つ」とはっきり記述する 自分の国は自分で守り抜ける防 なのではないか。「文明論之概 ようにいう 略一の結論部において福澤は次の う「私情」と「偏頗心」が不可欠

大国とはならず」というのは、亚 内外の区別を明にして我本国の独 事あるのみ、其目的とは何ぞや 立を保つことなり。而して此独立

度も繰り返された一必要最小限 度|規定と同一のものであろう 和安全法制成立時の議論の中で何 を保つの法は文明化の外に求む可

3文書の作成者もそのことを承

事力に対抗できるか。

は此国の独立を保たんがための

知していないはずもないが、これ み。故に、国の独立は目的なり 国民の文明は此目的に達するの術

まざるを得ないがゆえに、旧来の で超えると憲法論議にまで踏み込

戦略の方は非核三原則をうたうこ ったということであろう。核抑止 ノレーズにとどまらざるを得なか

の感がある 反撃能力一の整備によって対応 日本への武力攻撃に対しては

るべきだが、専守防衛、非核三原 すると明記されたことは評価され

ごしているうちに、ついに通常の 国家であれば内に秘めているはず よる軍事的庇護の下で数十年を渦

過ごすことのできた時代はもはや 身を隠し、密やかにも平穏に打ち てもアメリカの覇権の大樹の陰に しまったのではないか。どう考え の自己の承認欲求をさえ喪失して

うした惧れを私は払拭できない。 文書が閣議決定されてもなお、そ 心考を強いられた先人たちの言説 幕末から維新期に苦渋に満ちた

過去のものなのであろう。安保3

に最も深く学ぶべきは現代の日本

2023.4.14

本記事のweb版はこちら

をもつ。自己承認欲求は、それら

られたいという「自己承認欲求 た存在としての自国を他国に認め 個と同様に、国家もまた独立

とによって封印されてしまったか

クヤマ『アイデンティティ』)。 日本という国家は、アメリカに

体が個人の人生にとっての目的 動かされている(フランシス・フ のり、国家もまたこの欲求に衝

(わたなべ としお)

人なのに違いない。